

孔雀を飼う

mon



「私が朝学校に行った時には、もう殺されていたの。ウサギも、ニワトリも、みんなよ。そこら中に血とか羽根とかが散乱してて、飼育小屋の中はまるでホラー映画よ。大声で泣いてる私を、たまたまそこに来た先生が見つけたの。だけどね、私はその先生がやったに違いないって思ってるわけ。」

美奈はそう言って、ケーキの皿に残ったラズベリーソースを、フォークの先で皿の中心に懸命に集めようとしている。しかし、皿の上には、鋤いたような跡が残るだけで、一向にソースは中心に集まらない。やがて美奈は諦めたように手を止めて、フォークの先に僅かに付いたソースを舌先で舐めた。

「分かってるよ。けどさ、その先生がやったんなら、わざわざ君に近付いたりしないだろ？ 犯人だってバレるかもしれないじゃない？ たまたまそこを通して、泣いてる生徒がいたら、普通の教師だったら駆け寄る。可哀想に、守ろうとした生徒に、犯人だと思われてきたわけだ、その先生は。悲劇だね。」

直樹はそう言って、小さすぎてとても指が入らないコーヒーカップの柄をつまんで、一口だけコーヒーを啜った。

直樹は銀座の街があまり好きではない。土曜日となれば尚更だ。どこに行っても人ばかりだし、その殆どが「銀座に繰り出している」という雰囲気を感じているのも気に食わない。

銀座で売っている物は、荻窪でも売っているし（直樹と美奈が暮らしているマンションは荻窪にあった）、何もこの街に休日ごとに集まって、高い金を払ってそれを買う必要はないのだ。

例えばこのコーヒーだってそう。一杯八百円？ 正気の沙汰じゃない。荻窪の商店街にある、喫茶店のマスターが入れてくれる三百円のコーヒーの方が、よっぽど美味しいし、リラックスできる。要は、ステータスなのだな。直樹は銀座のコーヒーを啜りながら、一体これ、一口幾らするのかと思う、ざっと頭の中で計算してみる。

冷静に見れば銀座なんて、表面だけを立派に飾ったハリボテの店と、首都高速から降り注ぐ、排気ガスだらけの街だ。直樹はそう考えている。

つい一週間前までは、新宿で上映されていたのに、直樹と美奈の観たい映画は、その週末には銀座でしか上映されていなかった。仕方なく地下鉄を乗り継いでこの街にやってきた。そうでなければ好き好んで銀座になんて来ない。上映までしばらく時間があつたので、二人は有楽町にほど近い、オープンテラスの喫茶店に入って時間を潰している。美奈はケーキセットを、直樹はコーヒーだけを注文した。

美奈のミルクティーが半分ほどになった時、突然、彼女は飼育小屋の話をし始めた。その時直樹は、通り向かいの家電量販店の店員が、赤いハッピーをつけて、メガホンで何か叫んでいるのを見ているところだった。歳は直樹と同じくらいだろうか？ 朝から叫び続けているのだろう。その男の声は、すっかり枯れてしまっていて、メガホンを通すと、より一層その掠れ声が強調されて聞こえた。

「私はね、その先生にしがみついた時に、そいつが震えてたのを、今でも覚えてるの。なんていうかね、怖くて震えてるんじゃないっていうのだけは分かったわ。それに、それが起こったのは日曜日よ。日曜日の朝早くに、教師が学校で何してんのよ？ 私が犬の散歩で学校に行かなきゃ、月曜日まで飼育小屋はホラー映画のままだったのよ。きっと。」

「ホラー映画はよろしくないな。小学生には早すぎる。だからって、フランス映画が小学生のためになるかっていうと、決してそうじゃないな。結局無難な映画ばかりを見せられて子供は育つんだ。」

直樹は、さっきから店員のメガホンから吐き出されている言葉を聞き取ろうとしているが、何を言っているのか、さっぱり分からない。誰にも聞き取れない言葉を、掠れてしまった声で叫んだところで、店にとって何の宣伝になるんだろう？ それにあのダサイハッピー。こんなに人目のある場所で、あんな物を着せられるなんて。最低だな。自分だったらあんな仕事にはとても耐えられない。

「今日の映画が、無難な映画でないことを祈るよ。しかし、なんでこんなに人が多いんだろう？ 帰りの電車のことを考えるとゾッとするね。ここに通ってた頃は、あまり気にもしてなかったけど、今になってよくよく見てみると、この人混みは異常だよ。よくもまあ毎日通ってたもんだと我ながら感心するよ。」

直樹は大学を出て、この銀座にある、大手の広告代理店に就職した。世間に名も知られていた会社だったので、両親と、親戚縁者は手を叩いて「でかした」と喜んだ。大学の同期の悪友たちは、どうして成績も見た目もパツとしない直樹が、その会社に入れたのかと、皆が揃って首を傾げた。

運が良かったとしか言いようがない。直樹自身もそう思っていた。

しかし僅か一年で、直樹はその会社を辞めてしまった。理由はたくさんあり過ぎて、どれが決定的なものだったかは分からない。人には向き不向きがある。たまたまその会社に、直樹が向かなかっただけのことだ。直樹は自分にそう言い聞かせている。今でも。

その会社は、今直樹たちがいる店の目と鼻の先にある。通りに出れば、鏡張りのように磨き上げられた窓で一面を覆われた、真っ黒なビルを容易く見つけることができるだろう。新進気鋭のデザイナーによって設計された、近未来的なそのビルも、辞めることを決めてからは、デカイ棺桶を縦置きしたようにしか、直樹には見えなかった。てっぺんまで登れば、棺桶に付いた小窓から、見晴らしのいい風景を見ることもできただろうが、その時直樹の働いていた六階からは、外はおろか、未来なんて何一つ見ることはできなかった。

「ねえ、聞いている？」

美奈が、フォークを直樹の手に突き刺す真似をする。直樹はメガホンの声を聞き取るのは諦めて、美奈の方に向き直った。

「ちゃんと聞いているよ。それで？ その先生は何て言ったの？ 君がしがみついた時？」

「何も。なーんにも言わなかった。ただ一言だけ、帰きなさい、すぐに。って。私は、疑ってることがバレないように、従順なフリしてそのまま犬と帰ったわ。月曜日の朝には、飼育小屋はすっかり綺麗になってた。朝礼でもそのことは話題にもならなかったの。そんなのおかしいじゃない？ 友達もどっかに引っ越したんじゃないの？ とか呑気なこと言って。校長先生が話をしている間ずっと、そいつは遠くから私のことを見てたわ。視線を感じたの。恐ろしくて、私はずっと下を向いてた。それから、卒業するまでずっと、バカな女の子のフリしてあいつの気を引かないようにしていたの。だって怖いじゃない。そいつは私だけが目撃者だってことを、知ってるわけだから。」

美奈はそう言うと、もう一度ラズベリーソースを集め始めた。しかし彼女は本当は、ラズベリーソースなんて見てはいないのだろう。直樹はそう思った。白い皿一面に広がったソースは、まるで木の表面に浸食していく粘菌のように見えた。

直樹は、美奈がどうして突然、飼育小屋の話を始めたのかを計りかねていた。しかし彼女が、意味のないことを話しているだけとも思えない。美奈は、そういうタイプの人間ではない。

仕事を辞めて一年間だけ、直樹は仕事にも就かず、フラフラしていた。好きな時に飯を食べ、金が無くなったら、日雇いのアルバイトで小銭を稼ぎ、封切りになったばかりの映画を全部観て、夜中まで飲み歩いていた。もしかしたら、このままこういう生き方を続けていければ、幸せなのかもしれない。直樹はふと、そう思ったりもした。

しかし、そんな生活が長く続く訳がない。

ある時、直樹がアパートに戻ると、父親がドアの前で待ち構えていた。首を掴まれて、部屋の中に引きずり込まれると、「もしこのままの生活続ける気なら、お前とは絶縁する。もちろん、今日まで続けてきた仕送も止める。」そう言われた。その時初めて、直樹はコトの重大さに気がついた。仕送りを止められたら生活なんかしていけない。直樹は父親に土下座して、次の日からせっせと就職活動にいそしんだ。

再就職が決まって、親もひと安心したが、一番ほっとしたのは直樹自身だった。再就職先は、中堅の出版社だったが、一度ドロップアウトした自分が、このご時世にすんなり再就職できたのは、これもまた幸運なことなのだなと思った。それに、何よりも幸運だったのは、美奈と出会えたことだ。

その会社の、二つ上の先輩として働いていたのが、美奈だった。歳は同じだったが、直樹と違い、ドロップアウトなんてしていない美奈は、直樹より二年分多いキャリアを着実に積んでいた。最初は、同じ歳なのに命令口調で話し、先輩風を吹かせる美奈を、直樹はあまりよくは思

っていなかった。しかしある飲み会で、映画の話をした時から、二人は意気投合してしまった。美奈は不類の映画マニアだった。直樹もそれまで、かなりの数の映画を観てきたつもりだったが、美奈の足元にも及ばなかった。ある週末に、二人で新しい映画を観に行き、あれこれ意見を言い合った。次の週末にも、違う映画を観に行き、またあれこれ意見を言い合った後、隅田川のほとりを散歩して、キスをした。

それから二年付き合って、直樹は「結婚してください」と美奈に言った。「はい。結婚しましょう」と、美奈は答えた。

「泣いて家に帰った時、お母さんに、何があったのって？ って聞かれて、私は何も言えなかった。お父さんも出てきて大騒ぎになったけど、結局私がなんにも言わないもんだから、どうにもできなくて、二人とも諦めたみたいだった。結局そのまま。未だにその話を誰かにしたことはないわ。」

「一度も？」

「そうよ。今初めて人に話すの。」

どちらかと言うと、美奈はロジカルに物事を考える。すべてに説明を求めるし（映画に対しても）、常に相手の先手を先手を打とうとする。感情に任せて行動するという性格でもない。直樹はそう考えていた。

結婚する時もそうだった。式の日取りや、細かな打ち合わせ、親族や友人への招待状、全て美奈が手配した。今住んでいる荻窪の新しいマンションだって美奈が見つけてきた。直樹が何もしなくても、美奈は文句一つ言わなかった。「いいの、私の性格なんだから」そう言って美奈は、自分の手際の良さに満足しているようだった。元来、面倒くさがりで、出不精の直樹は、素直に美奈に甘えて、全てを任せていた。

しかし、この飼育小屋の話はどうだろう？ 話の着地点が見えない。美奈は記憶を辿りながら、見えた風景を言葉でなぞっているだけのようだった。「お星さま、くまさん、りんご、わんちゃん」まるで、目にした物をそのまま言葉にする小さな子供のように。

「でも本当に、間違いなくあいつがやったのよ。私には分かるの。」

「そうかなー。幻だったんじゃない？ ほら、幼児期には見えない物が見えるって言うじゃない。僕だって昔、スズメバチの巣を見つけてパニックになってさ、家に飛んで帰って、兄貴に泣きついたことがある。兄貴がその場所に見に行ったらさ、どこにもスズメバチの巣なんてないって言うんだ。そんなはずはないと言って、恐る恐る僕も見に行ったら、本当に何にもないんだ。確かにハチの羽音までしっかりと覚えてるんだけど、なんにもない。まあそれ以来、ハチは大っ嫌いだけだね。」

「違うの。そういうのとは、ちょっと違うのよ。」

美奈は自分の言わんとすることを、直樹が理解していないことと、それを上手く説明出来ない自分の両方に、苛立っているようだった。美奈がそういう風に、苛立ちを隠さないのは、珍しいことだった。いつもならそういう時、何かを彼女が抱え込んだ時、美奈は一人で部屋に籠ってしまう。誰にもその過程を見せずに、一人で解決してしまうのだ。部屋から出てくる時にはもう、何もなかったかのように、ケロッとしていて、直樹に当たり散らすようなこともなかった。

それが彼女のやり方であり、直樹が口を挟むことでもない。むしろ女性の持つ、あの特有のヒステリックさを見ないで済むことに、直樹は感謝さえしていた。

店の中から出てきた店員が近寄ってきて、ラズベリーソースですっかり散らかってしまった皿を、下げていいかと美奈に尋ねた。美奈はそれがまるで耳に入らないのだろうか、何も言わない。「どうぞ」と直樹が代わりに答えると、店員は不思議そうな顔をして、皿を下げていった。美奈の右手にはフォークが握られたままで、それはまだ、ラズベリーソースを探しているようだった。何かを懸命に思い出そうとしている。同時にその記憶からほつれた糸を、正しい順番に繋げようとしている。

直樹は、黙って美奈の言葉の続きを待った

その時、どこからか消防車のサイレンが聞こえてきた。音はだんだん大きくなり、数台の消防車が直樹たちの前を通り過ぎて行った。消防車は有楽町の駅の前に止まると、中から防火服を着た消防士が、そろそろと降りてきた。サイレンのけたたましさとは打って変わって、彼らにはあまり切羽詰まった様子は見られず、車を降りても、走り出す気配がない。おそらくは通報を受けたものの、出動した後に、それが誤報であったことが分かったのだろう。格好だけをつけるために、とりあえず現場には行くことになり、サイレンも切らずに、ここまで来たというわけだ。

公務員には体裁が必要なのだ。ちゃんと働いているということを、国民にアピールしないといけない。ステータスなのだ。直樹はそう思った。この街とおんなじだ。

サイレンの音と、赤い回転灯がクルクルと回るのに引き寄せられて、人だかりが有楽町の駅にできている。銀座の火事は炎の色までもが、人目を気にしてシックなのかもな。シックな火事。それは悪くないな。でも誤報だから火は出ていないか。直樹はどんどん増えていく野次馬を見ながら、ぼんやりとそう思った。

「孔雀だけがね。生きてたのよ。」

サイレンの音が止むと、美奈が突然そう言った。

「なんだって？」

「みんなズタズタに切り裂かれて、死んでいたのに、オスの孔雀が、一羽だけ生きていたの。私が小屋の前で泣いてる間中、羽根を広げて、あの眼の玉みたいな模様を、小刻みに震わせていたわ。それがね、とても怖い音がするの。何とも言えない音よ。聞いてはいけない音だと思ったわ。」

そう言って美奈は、手に持っていたフォークをテーブルに置くと、ミルクティーの残りに口を付けた。直樹はその続きを待ったが、彼女の口は、ミルクティーの甘ったるい香りに麻酔をかけられたように閉じられたままで、次の言葉がなかなか出てこない。急かすつもりはなかったが、直樹は待ちきれずに口を開いた。

「へえ？ そうなの？ どうしてまた犯人は、孔雀だけを生かしておいたんだろうね。不思議だな。」

「だから、犯人はあの先生よ。あいつはね、殺せなかったのよ。私にはわかる。あいつは孔雀に、全部見透かされた気がしたのよ。羽根を広げてられて、怖くて逃げ出したんだわ。それだけのことよ。だだのコンプレックスの強い臆病者よ。弱い立場の者にだけ威張ってみせることができるのよ。だから小学校の教師なんてしてたんだわ、きっと。」

ミルクティーの麻酔が解けた美奈は、吐き捨てるようにそう言った。

ちょうどその時、駅の中から消防士たちが出てくるのが見えた。彼らはお互いの顔を見て、笑いながら消防車に乗り込むと、今度はサイレンを鳴らさずに、直樹たちの前を通り過ぎて行った。彼らがいなくなると、一カ所に集まっていた野次馬たちも散らばって、均等に街の隙間を埋めていった。

美奈は、直樹の言葉を待っているようだった。しかし何を言えばいいのか、直樹にはよく分からない。孔雀が生きてよかったね、と言うべきなのか？ それとも、孔雀だけを生かしておいた犯人の心理を説明すべきなのか？ そんなもの、直樹にだって分かるはずはない。

「確かに小学生の頃って、先生はなんでも知ってる偉い人に見えたよね。正しいことだけを教えて導く、それこそ聖人のように見えた。でも今、その時の先生たちの年齢になってみると、そんな訳ないんだってことがよく分かるよ。彼らだって、ただの人間さ。弱いだけ。だからって、ウサギやニワトリを殺していいわけじゃないけどさ。ただ弱いだけなんだよ。きっと。」

しまった。的外れなことを言ってしまったかもしれない。直樹は恐る恐る美奈を見た。しかし彼女は直樹の言葉を聞いて、少しだけ安堵の表情を見せた。さっきまでの苛立ちは、もうどこかへ消えて行ってしまったようだった。あるいは、美奈は直樹の言葉なんてまるで聞いていなくて、一人で部屋に籠っている時と同じように、自分で解決してしまったのかもしれない。直樹はふとそう思った。

「そう。人は弱いわ。確かにね。でも私はその時、少し早すぎる段階でその事に気づいてしまったのよ。別に殺された哀れなウサギたちに同情してた訳じゃないの。私はね、上手く言えないけど、人間が誰でも持ち得る、説明不能な闇の部分、何の準備もなく見せられたの。そのことで、その先生に腹を立てていたのよ。とても。なんで今なの？ って。私は怖くて、混乱して、しばらくは眠れなかったわ。目を閉じると、孔雀の羽根の音がしてね。とにかく、私の少女時代は、大人になるのを、今か今かって待つだけで終わってしまったの。誰にも言えずに。」

美奈はそこまで言うと、直樹の目を見た。そしてまるで、何かから解き放たれたような穏やかな顔をして笑った。見ている者を包み込む、優しい笑顔だった。結婚してから、いや、付き合っていた時から、彼女がそういう顔で笑うのを、直樹はこれまで見たことがなかった。直樹は思わず、美奈の目から視線を逸らしてしまう。照れ隠しに、飲み干してしまった、空のコーヒーカップを手に取り、飲む真似をする。カップの中の空気が、ぬるい湿り気になって、直樹の口の中に入っていく。

「そうか、それは、何て言うか、ハードだったね。辛かったんだろう？ きっと。分かるよ・・・いや、分かってないのか。ごめん、上手く言えないや。」

「いいの、直樹。ありがとう。聞いてくれただけで十分よ。ごめんね、変な話で。びっくりしたでしょう？ でも、いつかあなたにこの話を聞いてほしかったの。なんだか話してスッキリしたわ。もう一杯注文してもいい？ 時間は大丈夫かしら？」

直樹は、店の中の壁に掛かっている、アンティークの時計を見た。映画の予定時刻まで、もう少し時間はあった。さっき皿を下げていった店員に、美奈がコーヒーとミルクティーを注文した。

飲み物が運ばれてくるまで、二人は、お互いの幼い頃の話をした。

美奈は三人姉妹の末っ子だったので、当然のようにオモチャや服は、姉たちのお下がりの物が回ってきた。彼女はそれが嫌で嫌で、いつか大きくなったら、ブラジャーだけは自分でお子遣いを貯めて、お気に入りのを買おうと決めていたのだと言った。

初めてブラジャーを着けた時の日のことは忘れないわ。ホックの金具を付けた時、やっと自分は「大人」の入口に立ったんだと実感したの。でも、一枚しかないブラジャーを毎日洗って、次の日までに乾かしてってというのは、とても大変だったのよ。直樹はそれを聞いて、思わず笑ってしまった。

直樹は、兄の影響で始めた、ギターの話をした。

兄弟っていうのは、どの家もそうだと思うんだけど、ある年齢までは、兄は弟に対して、絶対的なカリスマ性を持ってる。僕にとっても、兄の存在は絶対的で、いつもくっついて離れなかった。ある時、兄がギターを手に入れると、ちょくちょくそれを持ち出しては、兄の真似をして弾いていた。

でも、ある日を境にして、宿命的に弟は兄という存在から離れていく。僕は夏休みのキャンプに兄が出かけている時に、そのギターの弦を全部切ってやったんだ。兄は帰ってきて、火のように怒って僕を殴ったけど、僕はなんとも思わなかった。それ以来、ギターを弾いたことはない。というより、もともと興味なんてなかったのかもしれない。まあ、才能もなかったけど。

直樹がそう言うと、美奈は「残念ね、ギターって素敵な楽器なのに。何て言うか、形も小さな宇宙って感じがするし。私は好きよ」と言った。小さな宇宙か。そう言われてみればそう見えなくもないな。その宇宙に張られていた、六本の糸を、兄と自分とを繋いでいた糸を、愚かにも切ってしまったわけか。そう言えば、兄ともしばらく連絡を取っていない。今度電話でもしてみるか。

直樹がそんなことを考えていると、店の中から、トレイに二人分の飲み物を乗せた店員が出てきた。

注文した飲み物が、テーブルの上に乗せられると同時に、フラフラと彷徨っていた、過去への回想の意識が、現実に戻ってきた。二人はそれっきり昔のことは、何も喋らなかった。

「あのさ、僕に初めて、いや、誰にも話したことの無い記憶の話を君はしてくれたけど、嬉しいよ。ありがとう。その話自体は、とても特殊な体験だし、僕は完全には理解ができていないと思う。でも、こうやって君が正直に話してくれたってことを嬉しく思う。分かってくれるかな？

僕だけを選んで話してくれたってことがね。それに、思ったんだけどさ、今その話ができるってことは、君はもう立派な大人になれたってことなんだろうと思うんだけど？」

「そうね。あるいは、そうかもね。」

美奈はさっきまで人だかりのできていた、有楽町の駅の方を見て言った。彼女はさっきまで消防車がそこにいたことを知っているのだろうか？ 彼女は孔雀のことで頭が一杯で、消防車のサイレンなんて聞こえていなかったんじゃないのだろうか？

「でもね、これも初めて話すんだけど。私ね、その孔雀のことが、今でも忘れられないの。忘れられないっていうか、いつも、そのイメージを持ち続けて生きているの。働いてる時、電車に乗ってる時。何をしてもね。頭の片隅にその片鱗があるの。特に...あなたと寝てる時、私、いつも孔雀が羽根を広げてる姿を思い浮かべているのよ。そしてそれを上手くイメージできればできるほど、私は...その...とても興奮するの。知らなかったでしょう？ 知るはずないわよね。そういうのが、どうして起こるのかは分からない。ただ、起こるのよ。」

直樹は口に含んだコーヒーを、思わず吹き出しそうになった。彼女がそういう風に、セックスについてあからさまに話すのも、初めてのことだった。どちらかと言うと、そういうことに関しては、淡泊な方なんだと、直樹は思っていた。

「...そう、ええと、なんて言ったらいいか。それは、その、...オーガズムを感じるってことかい？ 孔雀のイメージで？」

「そう。そういうこと。」

「じゃあ君が毎回...イク時に、君の頭の中では孔雀が羽根を広げて、ブルブルと音を立てているわけ？」

「そう。そういうこと。どうしてかなんて、聞かないでね。」

直樹は、もう一度美奈を見た。彼女はどうしても分からないが、少しも恥ずかしがってなどいないようだった。さっきと同じ、穏やかな笑顔を浮かべて、静かに直樹のことを見つめている。

「さあ、そろそろ行かなくちゃね。もう時間でしょう？」

「え？ ああ、そうだね。そろそろ行かなくちゃね。」

直樹は我に返ると、テーブルの隅に置かれた勘定を手に取り、席を立った。とても長い時間をここで過ごしたような気もするし、あっという間に映画の時間が来てしまったような気もする。孔雀の話を聞いて、直樹の時間の感覚は、まるで頼りないものになってしまったようだ。

会計を済ませ、店を出た二人は、銀座の方に戻り、映画館に向かっている。

そこに行くには、以前直樹が勤めていた会社の前を通らなければならなかったが、もうそんなことは、何の気にもならない。映画好きな二人は、これまで何度もこうやって同じ映画を観てきた。きっとこれからだって、数えきれないくらいたくさんの映画を、一緒に観るのだろう。

でも、それはあとどれくらいなんだろう？ 直樹は、急にそれが知りたくなった。あとどれくらい、自分は美奈と一緒にいられるんだろう？ そう考えると、急に直樹は怖いような、寂しいような気持ちになり、思わず前を歩いている美奈の手を後ろから掴む。

「あのさ」

「なに？ どうしたの？ 急に。」

「そんなに興奮するなら、家で孔雀を飼おうか？」

「ばか。」

美奈はそう言って笑うと、少しだけ照れたような表情を見せた。そして直樹の手を引いて自分の方に引き寄せると、「さあ、行くわよ」と言って、歩き始めた。

上映まであと１０分

銀座から無尽蔵に流れ出てくる人並みを、なんとか掻き分けながら、二人は映画館に向かって
いる。もう予告編が始まっているかもしれない。でも、あのコマーシャルだらけの予告編なんて
どうでもいいんだ。本編はこれからだ。そうだ。

本編はこれからだよ。

直樹は美奈の手を離さないように、もう一度強く握り直すと。点滅し始めたスクランブル交差
点に向かって走り始めた。

「美奈！ 渡ろう！ 大丈夫だよ、まだ間に合うよ！」

—上映開始—

上映開始。

孔雀を飼う



<http://p.booklog.jp/book/31920>

著者 : mon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/monchi1024/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31920>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31920>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.